０４／０７／０４　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：満足欠乏症との訣別
聖書箇所：詩篇２３篇

昨年行なわれた世論調査によると、日本国民の（調査参加者）６７％以上の人が自分が生きているこの生涯に恐れや不安をもっていると回答しました。それはそのような恐れを持っていないと答えた３１．５％をはるかに上回る数でした。そして、人生がいったいどのようになるのか分からない、また、現在の日本が抱えている様々な問題、国の政策に関して不安をもつ人が６７％以上というこの回答は、このような調査が始まって以来、２番目に高い数字であったということです。また、同じその調査の中で、６０％弱の人が自分の人生に満足できる、またはやや満足できると答えたそうです。それに対して４０％近くの人たちが自分の人生には満足していないと答えています。このような不安、恐れが自分の人生への満足感に影響を及ぼしていることが反映されているのではないかと思われます。さらに、同じ調査で、今後自分の人生が良くなりますかという質問に対して、３０％以上の人たちが悪くなるだろうと答えたそうです。良くなると思っている人は実に７．５％です。

私たちが生きているこの社会にあって、満足を見い出すことが非常に困難になってきています。喜びや希望をもつことが困難な状況に陥っています。それは、このような調査を見なくても、私たちが普段の生活で接する様々な人たちや、いろいろな問題を考えると、よく理解することができます。私たちが日頃実感していることです。人生への恐れ、心配、不安は私たちの心から喜びにあふれる思いを取り去って行きます。このような中に私たちは今生きているのですが、その中でクリスチャンである私たちはどのように生きるべきでしょう？もし、今ここで先の世論調査と同じ質問をするなら、私たちの結果はどのようでしょう？一般の調査結果と同じでしょうか？それとも大きく違うでしょうか？同じ質問をダビデにするとしたら、ダビデの回答は間違いなく、「私は満足しているし、私は不安をもっていない」というものです。このような確信をもってダビデが詩篇２３篇を書くことができた事実は、今の多くの日本人にとって不思議なことなのかもしれません。

ある人はこれはダビデが青年時代、羊飼いであったときに書いたと言い、ある人はダビデの人生がうまく行っているときに書いたと言います。また、これが真実だと思われますが、ダビデが幸福な状況の中ではなく、5節に「敵」ということばがあることからも、息子アブサロムに追われエルサレムから荒野へ出て行ったときに書いたというものです。彼は困難の中でこの歌を歌ったのです。なぜ、そのようにできたのでしょう？これから3回に渡って全部で6節あるこの詩篇から、私たちが満足を得るその方法を学んで行きます。

☆　人生に満足を見出す秘訣

:1 主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

１．<u>神に焦点を当てる</u>　　１節

ダビデは初めにまず私たちが神に焦点を当てなければならないと言います。新約聖書の中で、パウロはこのように語っています。ピリピ４：１１－１３**「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。:13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」**と、パウロはここに満足の秘訣を語っています。あらゆる境遇の中で満足を見い出すことを学んだ、それを習得したと言っています。パウロは私たちクリスチャンはどんな状況の中でも満足することを学べるのだと言うのです。別の言い方をするなら、私たちが神によって救われた者であるなら、満足のない生活を送ることはできないはずだと。ではいったい、どのようにして満足を得るのかと質問が出てくるのは当然のこ

とです。むしろ私たちが聞くべき質問です。その回答はダビデのことばに見ることができます。ダビデはどのような困難な状況の中でも満足を見い出すことができる方法を私たちに教えています。

１）神がどのような方かを知ること

これが満足をもつためのカギです。「主は私の羊飼い」とダビデは言います。これは神の身分証明をしています。「神は羊飼いです」と。そして、「私は羊です」と言っているのです。詩篇２３篇は羊が見た羊飼いの姿を描いています。「羊飼い」という比喩の仕方は当時のイスラエルやその周辺の国々では不思議な表現ではありませんでした。実際に、エジプトやバビロニヤなどの文献を見て行くと、王や神々が羊飼いという表現をもって説明されることがたくさんあります。イスラエルではヤコブが創世記４８：１５で神が私の羊飼いであると言っています**「私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神。きょうのこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神。」**。また特に、イスラエルの王であるダビデに対して、彼がイスラエルの羊飼いであると表現していますし、来るべきメシヤがこの民を牧する羊飼いであると預言書は教えています。ゆえに、イエスがこの世に来られたとき、ご自分のことを「わたしは良い羊飼いです」と言われました。羊飼いの働き、責任はたくさんありましたが、簡単に説明するなら、羊飼いは毎朝羊の檻の所に行って門を開け、羊を呼びます。出てきた羊を牧草地へ連れて行き、羊が草を食べている間もずっと羊を見守っているのです。まさに、イエスの私たちへの働きそのものです。水のあるところに導き、危険から守り、迷い出た羊を捜し出して連れ戻します。夜になって羊を囲いに入れるとき、傷ついたところがないかどうか一匹ずつ点検します。傷には油を塗ってケアをし、囲いの中の羊を一晩中見張ります。イスラエル人は遊牧民としてこの働きをよく知っていました。ダビデ自身も羊飼いとして若い時代を過ごしました。そのダビデが何のためらいもなく「主は私の羊飼い」と言うのです。この神こそが私たちをケアしてくださり、導いてくださり、あらゆるものを備えてくださり、私たちを見守ってくださるのだと、ダビデの中には何の疑いもなかったのです。ダビデは神が与えてくださるその愛をよく理解していたゆえに、自分が常に満足し良い状態にいることができると確信していたのです。たとえ、どのような困難が襲って来ようとも揺るがない確信です。

ダビデは「**主**が羊飼いである」と言っています。この「**主**」は太字で記されています。これは神の名前を表わすときに使われる表現です。ダビデはこの表現を使うことによって、彼の羊飼いがイスラエルの民をエジプトから導き出した方、紅海を二つにわけて民を進ませた方、民に律法を与え、約束の地へと導き、ダビデ個人と契約を結び、ダビデの上に愛とあわれみを与え続け顧みてくださった、その偉大な方が彼自身の生涯の羊飼いであることを訴えたのです。このような神に関する理解がダビデの生涯において強い確信へと変わって行くのです。イザヤは４０：１０－１１でこのように言います。**「見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。:11 主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。」**、この文脈を見たとき、イザヤは１～３９章でイスラエルの民が罪を犯したゆえに、捕囚というさばきに遭うことを説明し、４０章で神はイザヤを通して言わせるのです。**「慰めよ。慰めよ。わたしに民を。」**とそのような捕囚にあっても神は必ず民に慰めを与えるということを教えたのです。その箇所で神は**「羊飼いのように」**あなたに必要なものを与え、あなたを導き助けを与え続けると言われるのです。エゼキエル書３４：１１－１５には**「まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。:12 牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中にいて、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。:13 わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。:14 わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。:15 わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。――神である主の御告げ。――」**と記されています。

ダビデにとって、生涯において彼を取り囲む状況がたとえどのようなものであったとしても、彼は自分の羊飼いを知っていたがゆえに、彼は満足を見い出すことができたのです。ダビデは神がどのような方であるのかをよく理解していました。完全な方であり決して間違いを犯すことがないと知っていたので、たとえどのような道を進んでいたとしても、それが彼にとって必要な道であることを知っていたのです。神が良い方であり、恵み深い方であることをよく理解していたゆえに、人生においてどのような取り扱いを受けたとしても嘆くことはありませんでした。また、神が全能であることを知っていたゆえに、どのような敵が彼を追ったとしても滅びることはないと知っていました。神が全知であると分かっていたゆえに、神の知恵と導きに信頼を置いたのです。そして、神が真実で誠実な方であるゆえに、どのような困難に満ちた状況にあっても神にすべてを委ね、神のうちに希望を見い出したのです。このようにダビデは彼の主が、偉大なる神が彼の羊飼いあることをよく理解していたのです。私たちがこの偉

大なる神にしっかり目を向け、神が私たちの必要を知っておられ、私たちを気遣いケアしてくださっていることを知り、常に完全な方法で私たちを守ってくださり、助け支えてくださっていることを私たちが理解するなら、日常の生活の中で私たちの心に満ち溢れ続ける様々な不平や不満は、必ず取り除かれます。なぜなら、今置かれている状況が最善だからです。神がこの場に私を置いてくださっていることをしっかり理解することによって、その状況を喜びと大きな期待のうちに乗り越えて行くことができるとダビデは言うのです。

２）神との個人的な関係をもつこと

これが満足をもつ基となるのです。「主は私の羊飼い」ということばは新約時代の信徒にはそれほど重要でないかもしれませんが、旧約時代には神を個人的に一人称単数で「私の神」と訴えることは珍しいことでした。人々は神は「イスラエルの神」であると考えました。イスラエル国民の神であると。それゆえに、ほとんど彼らは「私の神」という表現を使うことはありませんでした。事実、この詩篇を見るとき、何が最も強調されているか、日本語の聖書では１５回、原文では１７回、「私の」ということばが１～６節に使われているのです。「この方は私の神である」と。ダビデがこのような表現を使ったのは、たとえこの方がだれの羊飼いでなかったとしても、この方は「私の羊飼い」だと強調したからです。人々のリーダーとなった経験があるならよく分かることですが、たとえば、１００人の人々をケアする責任を負って最善を成そうとするとき、残念なことに一人二人の犠牲者が出てきます。止むを得ないことが起こるのです。しかし、ダビデは言います。確かに神は「私たちの神」だけれど「私の神」だと。ダビデは神と個人的な関係をもつことの大切さをよく理解していました。なぜなら、彼は自分の家の羊を飼っていたからです。多くの場合、雇われていた羊飼いは無責任な者が多かったのですが、自分の羊を飼っている人は一生懸命羊の世話をしました。一匹であったとしても最善のケアをしました。ダビデは確信をもっていました。この偉大なる神は、私たちの主であり、創造主である、私たちをエジプトから導き出すことができた、私たちに偉大な約束を与えてくださっているすばらしい方は、私個人の必要に対して、必ず最善の方法で答えてくださるということを教えるのです。「羊飼い」ということばがそのことをよく表わしているのです。ダビデは「主は私の巌です」とか「主は私の砦です」とか「主は私の盾です」とか、王です、救い主ですと言うことができたのですが、敢えて、「羊飼い」ということばを彼が選ぶのは、その羊飼いと羊の間にある近い個人的なケアを表わしたかったからです。ダビデは神がどのような方であるかをよく知っており、その偉大なる方と私は個人的な関係で結ばれていると言います。この方は私の最善を知っておられ、そのためにあらゆることをしてくださるのだと知っていたのです。そして、すばらしいことに私たちもダビデと同じように「主は私の羊飼い」と言うことができるのです。なぜなら、私たちのために救いを与えてくださった、私たちの罪を贖ってくださったイエス・キリストはご自身のことを「わたしは良い羊飼い」と言われたからです。ヨハネ１０：１１－１５**「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。:12 牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。:13 それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです。:14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」**。わたしの羊をわたしは守る、わたしの羊をわたしは導く、わたしの羊が迷い出るときにはわたしはその羊を捜しに行くと言われるのです。私たちもこのイエス・キリストを通して「私の主は私の羊飼い」と確信をもって言うことができるのです。ダビデはこの詩篇で自分を非常にへりくだらせています。なぜなら、ダビデ自身が自分は羊であると言っているからです。羊飼いであったダビデは羊がいかに愚かな動物であるか分かっていたはずです。けれども、こんな愚かな羊である私を偉大なる神は牧してくださっていると言うのです。弱い愚かな私を神は守り、導き、支え、助け、豊かにし続けてくださると。

３）正しい結論を導き出すこと

これが私たちが満足を得る秘訣であるとダビデは言います。全知全能の神がダビデ個人の最善に気を配って必要を満たそうとされているなら、彼自身が乏しいことはあり得ないのです。これは、ここで**「私は、乏しいことがありません」**とダビデが言っている以上にインパクトをもっています。これを直訳するなら「私は決して、断固として、どのような時であっても、いつであっても、何かに欠けることはありません！」と言うのです。神の羊として何か必要が欠乏していることはあり得ないということです。ダビデがここで言わんとしているのは、良い牧者である神以外に私たちに必要なものは何もない、ということです。もし、意訳するなら、私たちが生きているこの社会は、私たちに様々な必要があることを訴えます。新しい家、新しい車、日々の生活を満たすのに役立つ物、また、ある人には友人が必要だと、ある人にはパートナーが必要であると、いろいろな必要を訴えかけて来ます。それは、私たちには満足を得るために必要なものが欠けていると気付かせようとするのです。確かに、あるものは私たちに満足を

もたらします。健康であること、物をもっていること、また、人生が安らかに進んでいるときは満足感があるでしょう。しかし、私たちが覚えるべきことは、ダビデがいつこの詩篇を書いたかです。困難なときでした。欠けているから満足をもてないのではないのです。

初めにパウロのピリピ人への手紙を見ました。これはパウロが投獄されている時に書かれたものでした。このときの投獄は軟禁であって、パウロ自身がもうすぐ獄中から解放されることを期待していた、そのような中で書かれた手紙です。けれども、パウロには必要がありました。ピリピの信徒たちはパウロの必要のために捧げ物をしました。しかし、パウロはピリピの人たちの捧げ物を感謝しつつも、それがなくても私は十分満足していると告げているのです。**「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」**と。ダビデもパウロもよく分かっていました。自分にはすばらしい羊飼いがいることを。彼らにとって必要なものはすべて備えられていたことをよく分かっていたのです。私たちは彼らの言うことを誤解してはいけません。神は私の願っていること、欲していることをすべて与えてくださるのではありません。たとえば、食事がないとき、必要な経済力がないとき、必要な人間関係がないとき、神はそれらを与えてくださっていないのでしょうか？この２３篇の４節を見るとこのように書かれています。**「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても…」**と。ダビデが死の陰の谷を歩いているとき、そこに牧草があったでしょうか？ないのです。いこいの汀にもいませんでした。けれども、ダビデがその道を通ることが必要だったのです。ダビデの横には羊飼いである神がおられるのです。その神がダビデを死の陰の谷を歩ませて行くのです。それが彼にとって最善だからです。神は**「私を義の道に導かれ」**るとありますが、そこには「死の陰の谷」が含まれているのです。つまり、ダビデが通らなければならなかった道は「死の陰の谷」だったのです。だから、たとえそこに何がなくてもダビデは私には乏しいことはないとよく理解していたのです。神が私に必要なものを備えてくださっているからと。

旧約聖書にヨセフという人物が出てきます。ヨセフはその生涯に何一つ欠けたものがない生活を送ったでしょうか？否です。彼には兄弟からの愛が欠けていました。家族との交わりが欠けました。彼には召使として非常によい地位にいたその特権が欠けました。自由が剥奪されるという欠乏がありました。人とした約束の成就が欠けていました。しかし、彼の生涯を通して、彼がその終わりに語っていることを見ると、彼は**「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。」**（創世記５０：２０）と語っています。ヨセフはそのような道を通ることが必要であったとよく分かっていたのです。彼は欠乏していたのではなく満たされていたことを知っていたのです。様々な困難を経てもなお、彼は神を信頼し満たされていました。

私たちにはきっと様々な欠乏があるでしょう。しかし、ダビデはこの詩篇を通して私たちに教えるのです。満足の欠乏をもつ必要はないことを。もし、私たちが神が「私の羊飼い」であることをしっかり理解して、それに基づいた正しい結論を導き出すことができなければ、様々な必要に対して落胆し心に不満足がやって来ます。人生には辛いこと、嫌なことはたくさんあり、弱さを覚え、必要を覚えて涙ながらに日々を過ごすこともあります。しかし、その中で神はダビデを通して言われるのです。「わたしはあなたの羊飼い」だから、あなたは何も心配することはないと。今経験している試練は、あなたのためにわたしが特別に与えたものだから、その中で喜びなさい、その中で期待しなさい、その中で神に仕えることを学びなさいと言われるのです。私たちはいかに多くのときに、この正しい結論を導き出すことを忘れることでしょう。私たちは考えなければなりません。反省しなければなりません。神は「私の羊飼い」なのです。だから、「私は、乏しいことはありません」と、これは私たち一人一人が口にすることができることばなのです。「神が私の羊飼いである」、この確信こそ私たちに本当の心の満足をもたらすのです。

皆さんは神を羊飼いとして知っておられるでしょうか？皆さんは神を自分の個人的な羊飼いとして知っておられるでしょうか？皆さんは毎日の生活の中で正しい結論をしっかりと導き出しておられるでしょうか？もし、その答えが「ＹＥＳ」であるなら、たとえどのような困難が私たちの上にやって来ても、私たちは神が私たちの必要を満たしてくださっているということを、確信をもって答えることができるのです。私たちがその状況の中でどのように思ったとしても、神は言われるのです。「わたしはいつもあなたに最善をしている、だから私に信頼して従ってきなさい」と。

<u>申命記２：７</u>　**「事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。」**

<u>詩篇３４：１０</u>**「若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。」**

<u>詩篇８４：１１</u>**「まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。」**